

3. 薩摩藩派遣英国留学生

薩摩藩は村橋を含む 15 人の留学生と 4 人の使節を密かに英国に送り込んだ。慶応元年(1865)、久成 23 歳の時だった。

留学で藩意識と国家意識の葛藤が生まれる

村橋が最初に歴史の舞台に登場するのは慶応元年(1865)、23 歳の時のことだった。薩摩藩は村橋を含む 15 人の留学生と 4 人の使節を密かにイギリスに送り込んだ。

これは、藩主・島津斉彬の発案によるもので、彼は「西欧の近代的な技術を学び、豊かな強い国をつくらなければ、いずれ日本は列強に支配され、植民地化の道を辿らざるを得ない」と考えていた。留学生の派遣は打開に向けた一つの布石だった。この構想は安政 5 年(1858)斉彬の急死により一旦頓挫したが、7 年の時を経て五代才助(友厚)の建言によって、遂に実現されることになる。



洋装の留学生たち。後列左から2人目が村橋

文久 3 年(1863)の薩英戦争に参戦し捕虜となった経験から学んだ五代は、長崎で英国商人トマス・グラバーと懇意になり、海外情報を得ながら開明理論を構築していった。そして前述の「五代才助上申書」となる。この内容は、数字に裏打ちされた「上海貿易論」と「海外留学生派遣論」を軸に展開される「開国貿易を基礎とした富国強兵論」(犬塚孝明著『薩摩藩英国留学生』)である。

イギリス人たちに「サツマ・スチューデント」と呼ばれた 15 名の留学生のうち、門閥から選ばれた若者の一人が、村橋久成だった。

鎖国下の幕末の海外留学——イギリスへの出国は国禁をおかしての密航である。幕府の目をくらすために、全員が変名で呼び合い、琉球出張の名目で鹿児島を発ったのは慶応元年 1 月であった。2 ヶ月後、グラバー商会のオースタライエン号に乗船し、羽島浦を発った。

留学生たちは、大英帝国が繁栄をきわめたビクトリア王朝時代のイギリスを目の当たりにした。「世界の工場」といわれた近代産業と、市民が選挙権を持つ社会がそこにはあった。ロンドンには人口 300 万人を超える世界一の近代都市であり、14 年前にすでに第 1 回万国博覧会が開かれ、大量の鉄とガラスでつくられた巨大な建物が世界を驚嘆させた。街路にはガス灯がとまり、地下鉄が走る近代都市であった。

ロンドン大学に学び、初めて見る西洋文明に、村橋は激しいカルチャーショックを受けた。それは、35 年後の明治 33 年(1900)、ロンドンに留学中の夏目漱石が陥ったノイローゼもしくは鬱状態に似たものだった。あまりにも巨大で異質な文明にうちひしがれたといえる。

当初 2 年間で予定していた留学を打ち切り、出国の翌年、村橋は帰国した。

15人の留学生たち

■留学生たち

氏名	年齢	役職	後の氏名	帰国後の官職
町田 民部	28	開成所掛大目付学頭	町田 久成	元老院議官
村橋 直衛	23	御小姓組番頭	村橋 久成	北海道開拓使書記官
畠山丈之助	23	当番頭	畠山 義成	初代東京大学校長
名越 平馬	21	当番頭	名越 時成	
市来勤十郎	24	奥御小姓。開成所諸生	松村 淳蔵	海軍中尉、男爵
中村 宗晃	25	医師	中村 博愛	外交官、元元老院議官
田中 静洲	23	開成所句読師	朝倉 盛明	生野鉱山局長
鮫島 誠蔵	21	開成所句読師	鮫島 尚信	外交官
吉田 巳二	21	開成所句読師	吉田 清成	元元老院議官
森 金之丞	19	開成所諸生	森 有礼	初代文部大臣
東郷愛之進	23	開成所諸生	東郷愛之進	帰国後死去
町田 実積	19	開成所諸生	町田申四郎	
町田 清蔵	15	開成所諸生	町田清次郎	
磯永 彦輔	13	開成所諸生	長沢 鼎	アメリカ移住の葡萄王
高見 弥一	31	開成所諸生	高見 弥一	



(後列左から)
高見弥一・村橋久成・東郷愛之進・名越時成
(前列左から)
畠山義成・森有礼・松村淳蔵・中村博愛

■随行した4人の外交使節

氏名	年齢	役職	後の氏名	帰国後の官職
新納 刑部	33	大目付御軍役日勤視察	新納 久修	薩摩藩家老
松木 弘安	33	御船奉行	寺島 宗則	外務大臣
五代 才助	29	御船奉行	五代 友厚	大阪商法会議所会頭
堀 壮十郎	21	英語通弁	堀 孝之	



(後列左から)
朝倉盛明・町田申四郎・鮫島尚信・寺島宗則・吉田清成
(前列左から)
町田清次郎・村橋久成・長沢鼎